

戦時中の開成の英語

東京外国語大学名誉教授

日本女子大学教授

昭和 19 年 竹林滋(1926 - 2011)

私は昭和十四年(1939)の四月に開成に入学し十九年(1944)の三月に卒業した。従って戦時色がもっとも濃厚になった終戦直前一年間の開成の生活は体験していない。この辺りのことは私より後輩の、特に二学年下の四年生で強制的に卒業させられた学生の方にぜひ書き残して頂く必要があると思う。

私は英語が好きだったし現在も英語で飯を食っているのですが、当時の英語の先生はよく覚えている。一年のときはリーダーが千葉良祐先生、英作文が辻茂雄先生、二年がリーダーは千葉先生、作文は森亮先生(ゴリボン)、三年はリーダーは石田外茂一先生(ギャモ)、作文は森先生、英文法が加わって吉田冬蔵先生(カメレオン)、四年はリーダーが吉田先生で作文が田村芳郎先生、五年ではリーダーが田村先生で英作文が神崎保太郎先生であったような記憶がある。

入学のときは既に日中戦争は始まっていたがそれほど戦時色はなかった。英語の時間に足の不自由な田舎のお爺さんみないな人が出てきて、これが英語の先生かと正直言って少々がっかりしたが、今にして思えばこの先生が私の一生を決めたのかも知れない。このことについては最後に書かせて頂きたい。そこへいくと英作文の辻先生は最初の授業でいきなり英語で挨拶され、もちろんさっぱり分からなかったが風采もスマートだし、いかにも英語の先生という感じだった。二・三年で作文を受け持たれた森先生はいまから思うと大学院を出たてだったが、もの静かなおとなしい先生なので授業中悪童どもが騒いでどうしようもなかった。出席の返事に「イエッサー」と答えず、「ドッコイサー」などと答えた生徒もいたがそれでも先生は黙っておられた。見かねた図画の青野先生に「おとなしい先生の授業はいっそう静かにしなければいけない」と叱られたが効果はなかったようだ。しかし森先生はそのとき既にオマール・カイヤームの有名な、『ルバイヤット』の英訳詩の翻訳に関係されておられたのである。後に先生が松江高校(現在の島根大学)に招かれたと知って悪童のひとりが「ゴリボンってそんなに偉い先生だったのか」と言ったことばが今も耳に残っている。その後御茶ノ水大学などで教えられたが、引退されて島根大学の名誉教授となられた今でも押しも押されぬ英詩の大家であり、またラフカディオ・ハーンの研究家としても著名である。

森亮(1911 - 1994) :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A3%AE%E4%BA%AE>

三年でリーダーを教わった石田先生は私がシェークスピアの講読に出席させて頂いた中野好夫先生と大学で同級の方で、英語の先生というより文人といった感じの方だった。先生の著された『宮本武蔵「五輪書」詳解』(1943)について紹介記事が昭和四三年の『開成会会報』に載っており、また石田先生の訪問記事がやはり昭和四六年の『開成会会報』に記載されている。私は千葉先生の正確な発音を聞いた後なので、恐ろしく発音の下手な先生という印象が残っているが大人の風格のある先生だった。上級生から「ギャモは授業中

よくかんしゃく起すから注意しろよ」と申し送りがあったが、果たしてある日突然何かで立腹されて教室中を荒れ回られ、私など何の関係もないのに教科書を一ページ引きちぎられた覚えがある。しかし工作か何かの時間で焼物をされておられるときなどはご機嫌の様子だった。先生が陶芸家として知られた方だったと後で聞いた。

中野好夫(1903 - 1985) :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E9%87%8E%E5%A5%BD%E5%A4%AB>

「五箇山で暮らした石田外茂一(1901 - 1977)のこと」:

<http://blog.nanto-e.com/column/20/detail.jsp?id=14>

宮本武蔵「五輪書」(石田外茂一訳書言及) :

<http://www.geocities.jp/themusasi2g/gorin/g203.html>

四年のリーダーを受け持たれた吉田先生にはこれといった思い出はないが、府立十中(現在の都立西高)へ移られるとき、念願が叶ったと非常に嬉しそうなお顔で話された。このとき私は開成より十中のほうがそんなにいいのか、と反発を感じた記憶がある。吉田先生は戦後日本歯科大学の教授になられた。

四年の作文と五年のリーダーを受持たれた田村先生は神崎先生のお招きで開成に来た、というようなことを言われたような気がする。非常に熱心に教えて頂いたが典型的な受験英語で、五年のリーダーに有名なロングフェローの『人生の賛歌』が載っていたが「詩は入試に出ないから」とあっさりと飛ばされたのには失望した。千葉先生だったらきっと熱っぽく読んで下さっただろうと、今でも残念な気がしている。ただ商大志望の伊与田君と外語志望の私には特別に放課後ディクテーションの練習をして下さったのには感謝している。

五年で英作文を教えて頂いた神崎先生は開成の歴史に残る名物教師で私が今更何も語る必要はなかろう。亡くなられた直後の『開成会会報』(昭和四二年号)が先生の追悼号となっている。授業中もいわば言いたい放題、「イタリアで強いのはムッソリーニだけだ」と言われたことばがいまだに耳に残っている。どう見ても戦争に協力的とは思えなかった。神崎先生は英作文はいわばご専門で、教科書は使わず毎時間ご自分の作られたプリントを使用された実力派だった。私が何とか英語が書けるようになったのは先生のお蔭である。先生もどちらかというと受験英語的ではあったがそれほど表面には強く出されなかった。私たちは教わらなかったが内山常治先生とお二人は英語界で名の知られた方でよく研究社の英語雑誌に執筆されておられた。

四・五年生(1942/43 - 1943/44)になったころは世の中はすっかり戦時色を帯びてきて、生徒もゲートルを巻いて通学せよとか、毎月明治神宮に参拝するとか、嫌なことが増えてきた。中でも最も嫌だったのは軍事教練のために軍から派遣された配属将校が威張り出したことだった。私は体が弱くて銃が重くてかなわず、その上気が弱くて人前でとても大きな声が出せなかった。そのため教練は自然と見学するか、全くサボルようになった。しかし英語は大好きなので決して欠席をしなかった。開成では戦争が激化しても英語の時間を減らすようなことはしなかった。後で大学に入ってまわりの人たちに聞くと、英語の時間を減らしたりして時局に迎合した学校が結構あったようである。確か五年生の秋だったと思うが、英語が午前と午後にあってその間に教練の時間が挟まっていたとき、前後の英語

の時間は出席したのに中間の教練だけサボったのがばれてしまった。そのときは西野簾(ノレン)という配属将校に呼ばれて文字通り怒髪天を衝く勢いで「敵国語を勉強して教練を怠けるとは貴様は何たる非国民だ」と怒鳴られた。しかし今から思うとさきほど紹介した神崎先生のことばに代表されるように、開成の先生方は戦争協力にあまり積極的ではなかったようだ。配属将校は学校全体のそんな雰囲気イライラして生徒に当たり散らしたところがあったようにも思われる。先生方も英語を遠ざけるどころか、むしろ親しみを持っておられた方が多かったような気がする。二年生のときに音楽の平戸先生(平家ガニ)は **Home Sweet Home** を原語で教えて下さり、音楽教室で外人歌手の歌ったレコードを大事そうにかけられた。(後で分かったのだがそれはイタリアの名ソプラノ歌手ガリクルチの歌ったもので、私は懐かしいので最近 SP からの焼き直し盤 CD を買った。) 歌詞のなかで **Be it ever so humble...** というところのつながりがどうしても分からなかった思い出がある。また数学の田司先生は英国の教科書からだといって、英語で書かれた代数の問題を教室で配られたことがあったし、順列の授業で長橋先生(スッポン)は **Mississippi** の十一文字から作られる順列は何通りあるとか、という問題を出されたこともあった。そんなことで開成の戦時中の英語の授業にはほとんど戦時色は感じられなかった。

「ガリクルチ女史大音楽会」帝国劇場(1929.4-5) :

<http://blog.goo.ne.jp/1971913/e/c7116c8ba6a4012ecffde1df729008db>

ガリクルチ **Home Sweet Home** You-tube:

<http://www.youtube.com/watch?v=kLIVLuKmlp4>

開成に入学早々英語を教えて頂いた千葉良祐先生は私にとって一生忘れられない先生である。開成に保管されていて最近発見された履歴書によると先生は明治四年(1871)三月二二日岩手県一戸町のお生れである。二一年尋常師範学校を卒業後二六年まで小学校教員を勤められ、同年第一高等学校に入学された。普通中学からでなく師範学校からの一高進学は異例で、非常な秀才であったと推測される。そして三〇年(1897)に同高卒業後、東京大学英文学科に入学、三三年(1900)に卒業された。私たちが入学したときの校長の片山正夫先生(1877-1961, 物理化学者)とは一高入学、帝大卒業ともに同年である。当時の帝大の英文科は今日の東大英文科と違って超エリートが集ったところで、手元の「東大英文学会会員名簿」によると同期の卒業生は僅かに七人、七年先輩には夏目漱石(1867-1916)、三年上には上田敏(1874-1916)、土井晚翠(1871-1952)、四年下には厨川白村(1880-1923)など錚々たる名前が挙がっている。

片山正夫(1877-1961, 物理化学者) :

<http://kotobank.jp/word/%E7%89%87%E5%B1%B1%E6%AD%A3%E5%A4%AB>

帝大卒業後は熊本の八代中学、愛知の明倫中学に勤められた後、大正二年(1913)から二年間アメリカに留学されている。その当時アメリカ留学をした英語教師は数えるほどしかいなかったはずである。帰国して学会へ進出の矢先、不幸にも交通事故に遭われて片足を切断された。さぞご無念だったろうと推察される。それから長野県諏訪中学(1916-1918)、また以前の明倫中学(1919)を経て大正八年(1919)に開成中学に赴任されたが、一一年(1922)に請われて大阪外国語学校(現在の大阪外国語大学)の教授になられた。

天明3年(1783)5月1日 尾張藩校・明倫堂起校(庶民教育)：

<http://www.tcp-ip.or.jp/~meiwa-hs/history/meirin.html>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%84%9B%E7%9F%A5%E7%9C%8C%E7%AB%8B%E6%98%8E%E5%92%8C%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1>

私の教え子が大阪外語大で教えているので調べてもらい、また直接大阪外語大の職員係から送られてきた履歴書によると、大正十五年(1926)には英語科の主任教授をされ昭和九年(1934)に退職されている。大阪外語大時代のご自慢のお弟子に福井大学や神戸女学院大などで教鞭を執られ、英語の意味論の分野で大きな功績を残され、現在八六歳の山口秀夫教授がおられる。同教授の懐古談によると千葉先生は英文学史やシェークスピア、カーライル、マーク・トゥエーンなどの作品の講読をされておられたそうである。

ベーオウルフ「中世イギリス英雄叙事詩」：

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~midearth/fanta/beowulf/beobook.htm>

私の友人の父君が大阪外語出身でやはり千葉先生から「ハムレット」を習い、その折のびっしり書き込みのあるテキストを今でも大切に持っておられる。その後また開成にお戻りになったのは、よほど開成を愛されておられたのだろうか。一・二年生(1939/40-1940/41)の授業を担当されたのは、英語の基礎をしっかりと教えたいという千葉先生ご自身のご希望だったのであろう。先生は終戦近くまで開成で教えられ、その後故郷の一戸町に疎開され、戦後はそのままその女学校で教えられた。水原一氏による晩年の千葉先生の訪問記事が平成元年(1989)の『開成会会報』に載っており、それによると先生は昭和三三年(1958)一月、八六歳で亡くなられたとのことである。千葉先生は松葉杖をついておられたので雨や雪の日に傘がさせず、さぞお辛い思いをされたことであろう。当時は西日暮里の駅がなかったから、田端の駅から開成までの崖ふちの道を足袋を下駄に縛りつけて歩く千葉先生を敬礼して追い越す度に、何か申し訳ないような気持だった。先程紹介した教え子の山口教授が昭和一〇年(1935)に上京して千葉先生とお会いになったとき、先生はシェークスピアと中国の京劇の比較研究をされておられたそうである。

私たちは一年生の一学期に発音記号を千葉先生から徹底的に教え込まれた。私の専門は英語の音声学であるが、考えてみるとこれが音声学の講義の第一歩であった。千葉先生はhatやmanのaの母音を「〈ア〉ではないぞ。〈エ〉と〈ア〉の間だぞ」とやかましく指導されたときの先生の声色を今でもはっきりと思い出すことができる。先生の授業は熱がこもり迫力があつた。私は子供心にも次第次第にこれは偉い先生だと思ふようになった。先日弟が私に話したところによると、当時の私は家に帰っても弟たちに「今日は千葉先生にこういうことを習った」と得々として話していたようだ。私は先生を通じてすっかり英語のとりこになってしまった。最初は田舎の爺さんくらいに思っていた千葉先生がとても大きな存在に見えてきた。一学期の五月ごろだったか、先生は発音記号の説明の途中で、「実はな、itの[i]とeat[i:]とは響きが少し違うのだが、まあそんなことは君たちにはどうでもいいことじゃ」とさりげなくおっしゃった。私はもちろん何のことか分からなかったが、ずっとこのことが引っ掛かっていた。後年音声学を勉強するようになって初めてこの意味が分かった。これは今日の英語の発音教育上の大きな問題で、事実itの「イ」を長く

伸ばして発音しても正確には eat にはならないのである。英語の正しい発音を指導する上ではこのことは学生に必ず教えなければならないのであるが、現在の大学の英文科でもまだ教えないところが多い。千葉先生は半世紀も前の昭和一四年にこんなことまで私たちに教えて下さったのである。私は昭和五五年(1980)に刊行された『研究社英和大辞典』第五版の編者の一人として発音を担当したので、思い切って日本の英和辞典としては初めて it の母音と eat の母音には別々の記号を採用した。十二歳の少年のとき大先生から教わったことが実現できたことは非常な感激だった。ちなみにこの日本を代表する英和辞典の昭和二年(1927)の初版の編者で、あの有名な岡倉天心(1863-1913)の弟である岡倉由三郎は明治十八年(1888)の開成の卒業で、二・二六事件で襲われた岡田啓介首相と同期である。

岡倉由三郎(1868-1936) :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B2%A1%E5%80%89%E7%94%B1%E4%B8%89%E9%83%8E>

岡倉由三郎著『英語教育』1911 :

<http://iss.ndl.go.jp/books/R000000008-I000065796-00>

<http://d.hatena.ne.jp/TerasawaT/20110608/1307550737>

岡田啓介(1868-1952) :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B2%A1%E7%94%B0%E5%95%93%E4%BB%8B>

千葉先生は発音が正確で、fast と first をきちんと区別しておられた。ほかの先生はほとんどの方がどちらも「ファースト」だったように思う。また千葉先生の first や serve の母音は一種独特のもので、私の耳について離れなかったが、戦後外人の発音を聞くようになってからこれが真正のアメリカ英語の母音だということを知った。私はそのとき以来千葉先生は個人的にだれかアメリカ人から英語を習ったのではないかと思っていたが、先生の履歴書でアメリカへ留学されたことを知り納得がいった。

二年生の二学期のとき関係代名詞の説明の後、ふだんはあまりお立ちにならない先生が立ち上って、黒板にすらすらと次のような英文をお書きになった。

Two faces|which resemble each other|make us laugh,|when together,|by their resemblance,|though neither of them|by itself|makes us laugh. そしてこのように縦線を入れながら、「こんな長い文を一度に訳そうとしても難しいが、このように短く切って、「二つの顔」 「互いに似ている」 「我々を笑わせる」 のように一つ一つを区切って訳し、それから全体をつなげば案外楽に分かるものだ」というような意味のことをおっしゃった。私はこのとき resemble という単語を知ったのだが、それよりなんとなく面白い文だな、そういえばそうだな、と妙に感心してこの文が頭の中に残った。ところが大学を卒業して少したってから、必要があつてパスカルの『パンセ』の英訳本をめくっていたらこの文に巡り合ったのには驚いた。先生は中学の二年生に関係代名詞を説明するのに『パンセ』の訳文を使われたのである。三年生になって千葉先生に教えてもらえなくなったのは寂しかった。四年生になったある日の休み時間、廊下で同級の渡辺恒雄君(読売新聞社現社長)が千葉先生を捉まえて何か質問しているのを見た。彼はやはり千葉先生の学識を尊敬していたのだった。私は彼の勇気と大胆さが羨ましかった。私は気が弱くてとても大先生に質問するなど大それたことはできなかった。

私の恩師で英語教育の第一人者だった小川芳男先生は「とくに英語では最初に良い先生につくか否かでその人の一生における英語の運命が決まるといっても過言ではない」とあるところを書いておられるが、生れて初めて英語を習った先生が英文学史やシェークスピアを講じていた方などということは今の中学では全く考えられない。我々は幸福だったとつくづく思う。

小川芳男(1908-1990) :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E5%B7%9D%E8%8A%B3%E7%94%B7>

開成会からの依頼は戦時中の英語のことを書くようにとのことだったが、前にも述べたように少なくとも私たちの学年の英語の授業にはほとんど戦時色はなく、私には千葉先生の思い出が今でも鮮やかに残っているので、編集部に申し訳のない昔語りとなってしまったことをお詫びする。なおこの記事を書くに当たって貴重な資料を提供して下さった小坂橋英一・今宮邦・星野健治の諸氏、および大阪外国語大学の林田雅至氏に心から感謝の意を表したい。

(竹林滋「戦時中の開成の英語」(『開成会会報』第77号, 1993.6), p.68-75.)

開成中学校・高等学校 :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%8B%E6%88%90%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E3%83%BB%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1>

拝啓 突然失礼します。

貴君が大阪外大に勤務しているのを確かだいで前の年賀状か何かで知りましたが、今でもそうでしょうか。実はご面倒ですが一つお願いがあるのです。

もう半世紀も前の話ですが、私が中学の1・2年生のときに英語を習ったすばらしくできる先生がおりまして、その方が大阪外大の出身らしいのです。昭和33年に86才で亡くなられたそうですから、多分大正(あるいは明治?)時代の卒業生だと思います。そこで新学期が始まりまして大学へ行くようになりまして、お暇な折りに同窓会名簿で次のことを調べて頂けないでしょうか。

1. 多分英語部だと思いますが、語科と卒業年度。
2. 大阪外大で教官をしていたことがあるか。
3. これは余程古い名簿でないと不明と思いますが、開成中学へ勤める前の勤務先。

私が英語の教師なもので、戦時中の開成中学の英語教育について書けと校友会雑誌から、頼まれ、資料がなくて困っております。もしできましたらよろしくお願ひしたいのですが。

1993年1月5日

竹林 滋 (1926-2011)

肝心の点を忘れました。その先生のお名前は千葉良祐といいます。

千葉良祐(1871 - 1958) :

明治4年(1871)3月22日生

25年(1892)3月31日 岩手県尋常師範学校卒業(明治21年(1888)9月1日入学)
30年(1897)7月6日 第一高等学校卒業(明治27年(1894)9月7日入学)
33年(1900)7月10日 東京帝国大学英文学科卒業(明治30年(1897)9月8日入学)
34年(1901)5月7日 熊本県八代中学校教諭就任
35年(1902)9月19日 私立明倫中学校教諭就任
39年(1906)12月24日 同上校校長心得を命ぜられる(～明治42年(1909)1月解任)
大正2年(1913)1月4日 同上校教諭職免ぜられる
2年4月26日 - 4年(1915)6月8日 英語研究米国民俗視察渡米
5年(1916)9月24日 長野県諏訪中学校教授嘱託(～大正7年(1918)5月23日解任)
8年(1919)4月1日 愛知県立明倫中学校講師(同年9月12日)
8年9月13日 私立東京開成中学校教師就任
11年(1922)2月13日 任大阪外国語学校教授(昭和9年(1934)4月貳(2)日)
(旧大阪外国語大学庶務課・人事係に保存されていた履歴書より)

前略

いつぞやは千葉先生に関する資料で大変お世話になりました。校友会誌ができましたので、貴君の分と山口先生の分とお送りします。山口先生は住所が分かりませんので、申し訳ありませんが貴君の方から送っていただけませんか。私からよろしくとお伝え下さい。取り敢えずお礼とお願いまで。
元気で勤めていますか。私はいささかバテて、夏休み待ちというところです。

草々

(1993年)6月28日

竹林 滋

拝復

面倒なお願いに対して詳細な資料を送っていただき深く感謝致します。山口先生のお話は特に貴重でした。研究社で先生のご住所を調べてもらってお礼の手紙を差し上げます。山口先生が千葉先生を東京外語の出身とされたのは誤りで、一高・東大の出身です。私は中学の最初の二年間をこんなに偉い先生に習ったのは非常な幸福だと思っています。貴君が AV Journal に書かれた記事も興味深く読みました。取敢えずお礼まで。健康にご注意下さい。

敬具

1993年7月

竹林 滋